

教育格差について私たちにできることを考える

3年4組17番 西陽奈香
3年5組32番 松本結惟
3年5組33番 松本怜果

Keyword: 「教育格差」「文房具」「NPO法人ワールドギフト」「寄付」

1. はじめに

教育格差とは、個人の選択とは無関係に、生まれ育った環境によって受けられる教育の機会や質に差が生じる問題である。2015年に国際連合で採択されたSDG4が目指す「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」という目標に反して、現在も世界中で深刻な教育格差が存在している。特に深刻なのは、基礎的な読み書きや計算能力の習得機会の喪失、就業困難、世代間での貧困の継承といった負のスパイラルだ。国際労働機関（ILO）と国際児童基金（UNICEF）の報告によると、児童労働を強いられている子どもの数は1億6000万人に達し、劣悪な環境での長時間労働や強制労働、人身売買による性産業、子供兵士などの形で表れている。この問題の解決には、フェアトレード製品の購入による支援や教育格差の実態についての認識向上といった個人レベルの取り組みから、貧困対策、労働環境の改善、国際協力などの多角的なアプローチが必要である。私たち日本人の子どもが当たり前だと思っている教育機会が世界的には特別な環境であることを認識し、すべての子どもたちが平等に教育を受けられる世界の実現に向けて、個人、地域社会、国際社会それぞれのレベルでの継続的な取り組みが不可欠である。

2. 序論

では、教育を受けられない子どもたちをどのように支援すれば良いのか。私たちは、学校内で「世界で教育を受けられない子どもたち何人いると思うか」や「教育格差は日本にもあると思うか」という2つの質問をした。3年生69人に協力していただいた。みんなが教育格差についてどのくらい知っているのか、またそれぞれが考える教育格差の定義について知ることができ、探究活動をする上で大きな情報源になった。また、UNESCOの2019年の調査によると、世界では6~17歳の子どもたちのうち2億5,800万人は学校に通っていないことが分かっている。これは、この世代の子供の6人に1人にあたる人数だ。子どもたちを取り巻く教育環境は年々改善傾向が見られるが、新型コロナウイルスの影響を受けている。UNICEFの2022年の調査によると、同年の1月時点では推定6億1,600万人の子どもたちが部分的・全面的休校の影響を受けている。学校に行けない理由は他にも原因として挙げられる。学校が近くになかったり、学校があったとしても先生がいなかったり、家計が苦しいために労働したり、女の子であることが理由であったり、紛争や災害、家事や水汲みをさせられたりと教育を受ける機会を奪われているのが現状である。

UNICEFによると、子どもは、教育を受ける期間が1年延びるごとに彼らが大人になってからの収入は約10%増加すると分かっている。また、国の若者による学校教育履修期間の平均が1年長くなるごとに、その国の貧困率は9%低下すると分かっている。加えて特に、女の子への教育は5歳未満児死亡率の低下、出生率の低下などにも効果をもたらすとされている。また、そのような教育を受けた母親から誕生した子どもたちは、相対的に学校に通う可能性が高くなると報告されている。つまり、女の子への教育にも力を注ぐことで教育を受ける機会を妨げられる

ことが防げるということである。教育は子どもの権利条約で保障された基本的な権利である。この権利を保障するため、国際社会は1990年に「万人のための教育」を世界共通の目標として掲げている。すべての人に基礎教育として幼稚園・保育園や小学校、中学校などで生きていくために必要になる知識や能力を身につけるための教育を提供することを約束した。しかし、国際的に権利を保障のため目標を掲げ約束しているが実際教育を受けられない子どもたちの増加は止まらない。

目標を掲げて教育をすべての子どもたちのために届けられるよう約束することは大切だと思うが、形として教育を受ける機会を与えていくべきだと私たちは考える。

私たちは形にして支援するためのヒントをインターネットを利用して探した。その中で最も多く挙げられていたのは、支援団体による寄付や募金、募金を呼びかけるボランティア。

私たちが最終的にたどり着いた解決方法は、使わなくなってしまった文房具を寄付することだ。私たちは、使わなくなった文房具を集めるため呼びかけの校内放送をし、ポスターを掲示した。アプローチ方法は、生徒の皆さんから集めた文房具を難民支援団体(NPO法人)のワールドギフトさんに寄付して世界中の子どもたちに届けるという取り組みである。

3. 本論

〈調査結果と分析〉

全校生徒に呼びかけた結果集まった文房具は、鉛筆新品53本、12本入り鉛筆3箱、鉛筆中古245本、ペン35本、消しゴム20個、色鉛筆7ケース、クレヨン8ケース、定規7個、その他(鉛筆削り、ハサミなど)が集まった。集まった文房具を集計する際、ひとつずつ並べると普段学校で使っている机4個分の量であった。

文房具を集めて寄付する活動後、国際高校でこの活動がどのような影響を与えたのか知るため、アンケート調査を行なった。

質問内容は、「今回の私たちの活動を知っていたか」や「今回の活動に参加したか」、「活動について思ったこと」で、「今回の私たちの活動を知っていたか」という質問に関しては、約70%。「今回の活動に参加したか」という質問に関しては、5%という結果であった。(表1)

鉛筆中古	245本
鉛筆新品	53本
鉛筆12本入りダース	3箱
ペン	35本
消しゴム	20個
クレヨン	8ケース
色鉛筆	7ケース
定規	7本
その他(ハサミ、鉛筆削りなど。)	10個

(表1)

「活動について思ったこと」に質問に関しては、難民教育について教えてから活動を行えばより参加しようと思うという声や、短期間じゃなく定期的にイベントを行えば多くの人に参加できる、寄付した文房具がその後どのようなようになるか知りたい、持参可能な文房具のリストが欲しいなどの意見があった。難民教育に関して知った上で活動に取り組みたいという声に関しては、難民教育について探究活動している私たちが話を皆さんの前で行ってから活動への参加を呼びかける方が効果があったと考える。短期間ではなく定期的にイベントを行えば良いのではないかという声に関しては、短期間では課題に触れる機会が少ししかないが定期的に行うとその都度課題に関して触れる機会が多くなり身近に考えることに繋がるのではないかと考える。また、文房具がその後どのようなようになるか知りたいという声に関しては、その後文房具が辿っていく道筋を知ることによって安心して寄付が行えることに繋がると考えた。

〈考察〉

全校生徒に使わなくなった文房具を集める活動をして、文房具の数を集計した結果私たちが予想していた以上に集まったのは、私たちがより多くの方に参加していただきたいという熱い思いがポスター掲示、校内放送での呼び掛けで伝わっていたということ、また、難民教育に関して興味を持っていただいていたということが分かる。

活動に関して知っていたと答えた人の割合が70%に対し、参加した人の割合が5%という結果から、活動内容を知っていても参加したいと思う人が少ないのは難民教育に関しての知識があまりないこと、持参可能な文房具が何か分からない、文房具がどこにどのように届くか分からないと思っていたことが要因であると分かった。

4. 結論

私たちは、教育を受けられない子どもたちをどのように支援すればよいかという問いを立て、教育格差についての知識がどれくらいあるのか高校3年生にアンケート調査を行い、実際に国際機関が調査した学校に通えない子どもたちの数や通えなくなっている主な要因などのデータをもとに現状分析し、使わなくなった文房具を寄付する活動を国際高校・中学校の皆さんにも協力してもらった。

このようなアプローチ方法から、教育を受けられない子どもたちを支援するためには目標を掲げたり、約束することも重要であるが最終的には子どもたちが教育を受けられる機会を与えられるように形にして届けるべきだと思う。

校内でのアンケート調査や寄付を呼び掛ける活動など教育格差について私たちができることを試行錯誤して行ってきたが、もう少し課題についての知識を身に付けてもらえるよう工夫して行なっていくべきだったと思った。

教育格差という課題で探究活動を行ってきたが、探究する前とし始めた現在では視野に変化が見られた。探究する前では、教育格差について知っていたとしても自分は学校に通えているので大きな問題だと思わなかった。しかし、探究活動を始めると徐々にその考えが変わり教育格差はあってはならないもので、教育を受けられる機会があるかないかで人生を左右するのはもちろん、社会をよりよいものにしていくためには教育を受ける必要があるという考えへと変わった。

現在、グローバル化が進んでいる。世界のさまざまな文化、習慣、アイデア、に触れる機会が多くなっていくだろう。必ずしも、自身と同じ考えを持っているとは限らない。当たり前が当たり前ではないということもある。それぞれの考えを大切にしつつ、困ったり悩んだりしているのならば自身ができることで役に立ちたいという思いで真剣に向き合おうと思う。

誰かの役に立ちたい、誰かの支えになりたいそのような気持ちを失わず今後過ごしていきたい。

5. おわりに

グローバル化が進展する現代社会において、世界の多様な文化、習慣、アイデアに触れる機会が増加している。この状況下で重要なのは、自分とは異なる考え方や価値観を持つ人々との出会いを通じて、「当たり前」が必ずしも普遍的なものではないという認識を深めることだ。特に教育の分野では、日常的に学校に通い、様々な教科を学び、友人と交流できることが、世界的に見れば決して当たり前ではないという現実がある。NPO法人ワールドギフトの活動を通じて見える世界の教育格差の実態は、この認識を一層深めてくれる。教育を受けられない子どもたちの存在やその背景について、単に知識として理解するだけでなく、具体的な行動を起こすことの重要性も明らかになってきました。たとえ活動の規模が小さくても、誰かの役に立ちたい、誰かの支えになりたいという思いを持ち続け、それぞれの考えを尊重しながら、困っている人々に対して自分にできることで貢献していく姿勢が大切だ。グローバル化時代において、このような異文化理解と実践的な支援活動の組み合わせが、より良い社会を作り出すための重要な要素となる。

6. 参考文献・出典

松本ふみ. “教育格差とは”. Save the Children. (2021).

<https://column.savechildren.or.jp/education-disparity>, (2024-10-4)

大川智也. “SDGs目標4で解説すべき9つの問題点-問題点に向き合う取り組み5選を紹介”. SDGs COONNECT. 2022年6月27日. <https://sdgs-connect.com/archives/39470>, (2024-10-4)

国際協力NGOワールド・ビジョン・ジャパン. “SDGs目標4 質の高い教育をみんなに/ 現状と私たちにできること”. World Vision. (2022).

https://www.worldvision.jp/children/education_26.html#d0e9d87eb78fa54e47cd213ca7606442, (2024-10-4)

児童労働ネットワーク(CL-Net). “児童労働とは いま、世界の子どもの10人に1人が児童労働者”. 児童労働ネットワークCL-Net. (2021). <https://cl-net.org/child-labour/>, (2024-10-4)

world gift npo法人ワールドギフト.(2023年09月15日). <https://world-gift.com/>, (2023-10-24)